

●論文

9・11とフランス現代思想 ——ボードリヤールとトッド

塚原 史

目次

1. はじめに——「現代思想」の(再)定義
2. ボードリヤールと『テロリズムの精神』
3. トッドと『帝国以後』

キーワード

9・11 (le 11 septembre; September 11)

現代思想 (la pensée contemporaine; contemporary thought)

ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard, 1929-2007)

エマニュエル・トッド (Emanuel Todd, né 1951)

グローバリゼーション (la mondialisation; globalization)

Le 11 septembre et les penseurs français: Baudrillard et Todd
September 11 and the French Thinkers: Baudrillard and Todd
par/by FUMI TSUKAHARA

1. はじめに——「現代思想」の（再）定義

「現代思想」という表現が時代区分としての「現代」の範囲を越えた意味作用を伴って、私たちの文化圏に登場するようになったのは、同名の月刊思想誌が東京で創刊された1973年以降のことだろうか¹⁾。つまり、相当乱暴な言い方をすれば、歴史的には産業革命と市民革命をきっかけとして18世紀末頃から成立した西欧起源の近代社会の成立と発展そしてその問い直しにかかわったルソー、カント、ヘーゲルあたりからマルクス、ニーチェさらにはフロイト、フッサール、ソシュール等々、広範囲にわたる思想家たちの言説と実践を（西欧）「近代思想」と呼ぶとすれば、「現代思想」とは、一般的にはその事実上の延長として、1914～19年と1939～45年の二度目の世界戦争がもたらした物質的、精神的廃墟から芽を出して生い茂った（そして異種混合を果した）サルトル等の実存主義やレヴィ＝ストロース等の構造主義、そしてそれ以降地球規模で発展をとげた消費社会における、西欧近代の枠組みを超える思惟の展開（それが「ポストモダン」と呼ばれる時期があったことは記憶に新しい）を指して用いられていると思われるかもしれない。

しかし、とりわけ実存主義の社会的受容過程が示唆しているように、サルトル以後の「現代思想」は、こういってよければ「近代思想」との架け橋をあえて宙吊りにして、ジャン＝フランソワ・リオタールが1973年の彼の著作の表題を『マルクスとフロイトからの漂流』と名づけたように²⁾、歴史主義的な枠

1) 雑誌『現代思想』は1973年4月青土社から創刊された。参考までに付記すれば、本稿の筆者による同誌への最初の寄稿は1980年1月号掲載のシャルル・フーリエ『愛の新世界』邦訳（部分訳）であった。

2) Jean-François Lyotard, *Dérive à partir de Marx et Freud*, 10/18, 1973. 邦訳、ジャン＝フランソワ・リオタール『漂流の思想—マルクスとフロイトからの漂流』（今村仁司、塚原史、

組みから離れて新たな岸辺をめざそうとしたといつてよいだろう。この方向では、1985年にアンナ・ボスケッティが『知識人の覇権』³⁾で、ブルデューの「文化資本」の概念を応用してフランス社会で「現代思想」が獲得した新たなステイタスを鋭く考察したことが想起される。

それでは、近代思想の付属物ではない「現代思想」とは、いったい何のことなのだろうか。もちろんこの問題に関して「正解」があるわけではなく、立場によってその解釈は異なるだろうが、本稿のテーマに関しては、上述の月刊思想誌に健筆を奮った社会哲学者で『暴力のオンオントロジー』、『排除の構造』、『社会性の哲学』等の著作で知られる今村仁司(1942-2007)の1987年の発言が参考になる。四半世紀前のものだが、今なお示唆に富んでいるので、改めて紹介しておこう。

「思想の現在」と題された講演で、今村は「現代思想を広義に解するとすれば、ただ今現在、人々をつき動かす思想はすべて現代思想です」と述べてから、こう強調していた。

「現代の思想を特徴づけるものは、異者との出会い、異者への驚き、であります。[……]物を深く考えるとは、この驚きの体験なしにはありえないのです。現代の諸思想のうち卓越したものは例外なく、この驚き体験をもっています。異質的なもの、絶対に他なるものを探求すること、これが現代思想を考える場合のポイントになるでしょう、思想の最先端とは、時間の上で新しい段階にあるものを言うものではありません。最先端とか前衛というものは、自分とは異なる存在者を適確にキャッチし、それと格闘することを意味します。単に目新しいものは、流行であっても前衛ではありません。[……]異質のものを教える思想のみが現代思想の前衛です。」⁴⁾

下川茂訳、国文社、1987年)。

- 3) Anna Boschetti, *Sartre et «Les Temps modernes»*, 1985. 邦訳、アンナ・ボスケッティ『知識人の覇権 20世紀フランス文化界とサルトル』(石崎晴巳訳、新評論、1987年)。
- 4) 今村仁司「思想の現在」(『河合ブクレット』、1987年)初出、『現代思想の基礎理論』(講談社学術文庫、1992年)に再録。

先ほど、やや不用意に「本稿のテーマ」といったが、それはごく単純には、2001年9月11日アメリカ合衆国東部を襲ったイスラム過激派による同時多発テロと、この世界史的カタストロフ直後（あるいはその後間もない時期）のフランスの思想家たちの論考を、事件から10年以上が過ぎた時点で改めてふりかえることであり、そのめざすところは、今村の言葉を借りれば「異質的なもの、絶対に他なるものの探求」としての思想が彼らの論考中でどのように表現されたかを確認することをつうじて、あえて強調すれば、21世紀の「現代思想」の新たな可能性を模索することなのである。

なぜ「フランス」か、といえ、やはり今村仁司の言葉が印象的である。上述の講演で、彼はこう述べていたのだった——「この2、30年ばかりの間〔1950～80年代〕は、フランスが現代思想の前衛でありました。いく人かのすぐれた思想家や学者が登場しましたが、彼らはいずれも前衛にふさわしく異者・異物を求め、自民族中心主義を突破し、外への思考を実践したのです」⁵⁾。

ここで「異者」という今村の造語とも思える見慣れない表現が、自己対他者の二項対立を担う「他者 (autre/autrui)」に代わって「自民族中心主義を突破」するアイディアとして提案されていることに注目するなら、それが西欧近代思想を準備した普遍主義的形而上学、つまり理性的主体という「大きな物語」の主人公としての「近代人」にとって代わる、新たな主体形成（というより「主体／客体」の悪循環を断ち切る、文字どおりの異者・異物）に関わっていたことは明らかであり、たとえば、ほぼ同時期のツヴェタン・トドロフの著作『われわれと他者たち——人間的多様性に関するフランス的考察』（1989年）⁶⁾の「他者たち (autres)」などと響きあっていたことが想起されるだろう。

前置きが長くなったが、2001年9月11日の出来事を、近代性が構築したシステムの中心部への、これらの「異者」や「他者たち」の突然の侵入のヴァイオレントな光景として改めて見なおすとき、そこには10年以上前の「現代思

5) 同上書。

6) Tzvetan Todorov, *Nous et les autres. La réflexion française sur la diversité humaine*, Seuil, 1989.

想」のさまざまな言説が忘却の底から浮かび上がってくる。本稿では、9・11に関連して対照的な論考を発表した2人のフランスの思想家を選んで、彼らの対立する主張を再考することにしたい——ボードリヤールとトッドである。

2. ボードリヤールと『テロリズムの精神』

ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard 1929-2007) といえば、1970年代から記号論的消費社会論で世界的に注目され、その後、オリジナルとコピーの二項対立を超えるシミュラクル (オリジナル不在の「コピー」) によって現実が記号化・データ化されるシミュレーションの時代の到来をいち早く説いて「現代で最も重要な知識人の一人」と目された思想家だが、最近ではあまりなじみのない向きもあるだろうから、とりあえず *Stanford Encyclopedia of Philosophy* (SEP 電子版) の記述を引用しておこう。

French theorist Jean Baudrillard (1929–2007) was one of the foremost intellectual figures of the present age whose work combines philosophy, social theory, and an idiosyncratic cultural metaphysics that reflects on key events of phenomena of the epoch. A sharp critic of contemporary society...⁷⁾

といっても、ここでボードリヤールの多岐に渡る著作の内容に立ち入るわけではないが、9・11の出来事に関する彼の考察に (再) 接近する前に、ボードリヤールが1970年の『消費社会の神話と構造』で、すでにこう書いていてことを、まず初めに思い出しておこう。

「マスコミュニケーションがわれわれに提供するのは現実そのものではなくて、現実の眩暈である。[...] われわれは記号に保護されて、現実を

7) スタンフォード大学のSEP電子版 (最新版) による。なお、この項の筆者はアメリカにおけるボードリヤール研究の第一人者ダグラス・ケルナー (Douglas Kellner) UCLA教授である。

否定しつつ暮らしている。これこそまさに奇跡的な安全というものだ。世界についてのさまざまなイメージを目にする時、東の間の現実への侵入とその場に居合わせないですむという深い喜びとを誰が区別したりするだろうか。イメージ、記号、メッセージ、われわれが消費するこれらのすべては、現実世界との距離によって封印されたわれわれの平穏であり、この平穏は現実の暴力的な暗示によって、危険にさらされるどころかあやされているほどだ。』⁸⁾

さて、2001年9月11日午前8時46分と9時03分に、マンハッタンの当時世界最高層を誇っていたワールドトレードセンター（WTC）ツインタワーに二機のハイジャック機が相次いで激突し、2つの塔が次々と崩落して3000名の生命を奪うという過去に前例のないテロ行為（同日9時40分にはもう一機がワシントンDCの国防総省ビルに激突炎上）は、その実行犯グループがイスラム系国際テロリスト「アルカイダ」のメンバーだったことが判明するや否や（当時犯行声明はなかった）、文明の衝突説から第4次世界戦争説まで、さまざまな解釈を生じさせることになった。

この前代未聞の出来事から2ヶ月足らず後の2001年11月3日、ジャン・ボードリヤールは、フランスを代表するメディア『ル・モンド』紙上に「テロリズムの精神（L'esprit du terrorisme）」と題する論考を発表した。⁹⁾ 同紙第一面

8) Jean Baudrillard, *La société de consommation, ses mythes, ses structures*, Gallimard, 1970. 邦訳『消費社会の神話と構造』（今村仁司、塚原史訳、紀伊國屋書店出版部、1979年）。

9) 「テロリズムの精神」原書は、その後2002年1月に同名の単行本（*L'esprit du terrorisme*, Galilée）として出版された。同年11月にはボードリヤールの9・11に関するその他の評論（「ツインタワーのためのレクイエム」、「テロリズムに関する仮説」、「グローバル・パワーの暴力」）が*Power Inferno*の表題で同じくガリレー書店から刊行された。「テロリズムの精神」の邦訳は塚原史訳で、まず2002年1月に雑誌『環』第8巻第1号（藤原書店）に掲載され、その後2003年8月に邦訳『パワー・インフェルノ』（塚原史訳、N T T出版）にヴァージョンアップして収録された（この邦訳論集は原書の3評論に「テロリズムの精神」を加えたものである）。クリス・ターナーによる英語訳は、まず2002年に『テロリズムの精神』（*The Spirit of Terrorism* translated by Chris Turner, Verso）だけが、翌年には『新版テロリズムの精神』（New Edition, Verso）が*Power Inferno*の全訳として刊行され、英語訳発表直後にニューヨーク・タイムズのブックレ

上段には当人の顔写真の下に「虚構に対抗する現実。みずからに対抗する自殺的西欧世界。われわれの論理に対抗するテロリストの論理。地上では《政治の不在の、手段による継続としての戦争》〔アメリカのアフガニスタン爆撃〕。9月11日とその後の展開を大西洋の両岸で読まれ、論議されている哲学者、ジャン・ボードリヤールが分析する」という編集部によるリード記事があって、最大級の扱いであり、本文は10～11面に掲載されていた。¹⁰⁾

そこで著者はまず、こう言ってよければ、加害者と被害者の立場を無謀にも逆転させて「その耐えがたいパワーを行使して、あの世界中にひろがった暴力を助長し、その結果、私たちすべてが内心（それと知らずに）宿しているあのテロリズムへの想像力をはぐくんだのは、まさにこの超強国」であり、「これほどの覇権を獲得すれば、どのような強国でも、誰もがその破壊を夢見ずにはいられない」と述べてから、次のような歴史的「暴言」を発したのだった——「結局、それを実行したのは彼らだが、望んだのは私たちのほうなのだ (À la limite, c'est eux qui l'ont fait, mais c'est nous qui l'avons voulu.)」。¹¹⁾

ボードリヤールは、2003年秋の来日の際にこの発言にふれて、あの時はテロリストとイスラムを擁護していると一部のジャーナリズムに誤解されたこともあったが、もちろん自分はそんな立場を取ったことは一度もないと、筆者に語ったものだが、彼の真意は『テロリズムの精神』を素直に読めばストレートに伝わってくるだろう。ここで重要なのは「彼ら」が直接的にはイスラム過激派だったとしても、「私たち」が「世界秩序の不幸な裏側に落ちこんだ人びと」ばかりでなく、「世界秩序の利益を共有する人びと」つまり西欧消費社会

ヴェューで「First prize for cerebral coldbloodness goes to French Philosopher Jean Baudrillard…」と評されたように賛否両論の激しい反応を引き起こした。なお、本稿では初出評論を「テロリズムの精神」、単行本（原書）を『テロリズムの精神』と表記するが、テキストの異同はみられなかった。

10) *Le Monde*, le 3 novembre 2001. 第一面の表題は *L'esprit de la terreur*（恐怖の精神）だったが、ボードリヤールの評論自体のタイトルは、もちろん初出時から「テロリズムの精神」である。

11) 邦訳は前出『パワー・インフェルノ』（塚原史訳、NTT出版）による。『テロリズムの精神』からの引用に関しては以下同じ。

の「ゆたかさ」を享受する「私たち」を意味していたことである。「あらゆる決定的な秩序、決定的な権力に対するアレルギーは、さいわいなことに普遍的なものであり」、「強国の権力の増大は、まったく論理的に、権力の破壊への意志をひたすら激化させる」のだ。

こうして、9・11のテロリズムの、いわば象徴的な賭け金が明らかになる。「権力が過剰になりすぎて、誰もその挑戦を受けて立てないようなシステムに、テロリストたちは取り引きが不可能であるような、決定的な行為〔自爆テロ〕で立ちむかう」のであり、彼らはこのシステムの中心部に「他の何ものにも還元できない特異性（人種、個人、文化）」を突入させようと試みたのだった。したがって、この種の（犯行声明も対価の要求もない）テロは「文明の衝突でも、宗教の衝突でもなく、イスラムもアメリカもはるかに超越した行為」であり、「グローバリゼーションに対抗しているのは、じつは世界そのものなのだ」¹²⁾ という状況の進行が、ボードリヤールの分析をつうじて、おそらく初めて示唆されたのである。

前述の2003年来日の折の発言で、彼はこうした状況下では、「グローバリズムに還元されないあらゆる特殊性は9・11のような極端な出来事によって突出するほかはなく、善の帝国〔アメリカ〕は敗北しないにせよ、たえず挫折する定め」なのだと、語気を強めて強調していた¹³⁾。当時74歳の思想家のこの言葉のうちに、私たちは「異者・異物を求め、自民族中心主義を突破し、外への思考を実践」（今村前出）してきたフランス現代思想の先端的な現われを読みとることができるだろう。

この点に関して、『パワー・インフェルノ』に収録された別の論考「グローバル・パワーの暴力」で、ボードリヤールはこう述べていた。

「テロリズムの場合に問題とされるのは《文明の衝突》ではなくて、差

12) «Car c'est le monde lui-même qui résiste à la mondialisation.» (強調はボードリヤールによる。)

13) 塚原史「帝国は挫折する定め—仏思想家ボードリヤール大いに語る」、読売新聞2003年10月21日付夕刊。

異を消去する普遍的文化 (une culture universelle) と、どのような領域のものであっても、別の何かに還元不可能な他者性 (une altérité irréductible) をすこしでも守りぬこうとするあらゆるものとの間の、ほとんど人類学的な対決なのである。」¹⁴⁾

ところで、先ほどの『消費社会の神話と構造』の一節からの引用を、このへんで思い出しておこう。そこで9・11の30年ほど前に、ボードリヤールは「われわれは記号に保護されて、現実を否定しつつ暮らしている。これこそまさに奇跡的な安全というもののだ」とシニカルに言い放っていたが、9・11の「出来事」と「現実」の関係について『テロリズムの精神』では、こう述べられていた。

「今回の場合、ヴァーチャルなものと思われてきた世界に現実そのものと現実の暴力が再び出現するのを見た、(おそらくある種の安堵感とともに) 人びとは信じたのだった。[...] けれども、現実はどうにもフィクションを乗り越えたのだろうか。そう見えるのは、現実がフィクションのエネルギーを吸収して、現実自体がフィクションとなったからだ。」

この指摘は、あのマンハッタンのカタストロフの新たな射程を示唆している。なぜなら、1970年代頃から(アメリカの社会学者ブーアスティンが「現実」の擬似イベント化を説いた時期にまで遡れば1960年代頃から)¹⁵⁾、消費社会の住人たち(とりわけ、その管理者たち)が記号化された「現実」によって(戦争、暴動、無差別殺人等々)剥き出しの暴力的な事実をイメージ化してきたという社会過程に、9・11が「現実の暴力」を再注入したかのように見えたとしても、じつは、そのような印象自体が虚構であり、ハリウッド製パニック

14) Jean Baudrillard, «La violence du mondial» in *Power Inferno*, op.cit. 邦訳「グローバル・パワーの暴力」(『パワー・インフェルノ』、前出)。

15) Daniel Boorstin (1914-2004), *The Image: A Guide to Pseudo-Events in America*, 1962 (初版)。

映画さながらに「現実自体がフィクション」となったという状況を、ボードリヤールは鋭く見抜いていたからである¹⁶⁾。

『テロリズムの精神』で、彼は「今回の特異な出来事の場合、20世紀の大衆を魅了してきた二つの要素が、最高度のレベルで接合されている。映画の白魔術とテロリズムの黒魔術、〔メディアの〕映像の白い光とテロリズムの黒い光である。〔…〕テロリズムのスペクタクル〔見世物〕化はスペクタクルのテロリズムを押しつける」と述べたが、この言葉は、9・11以降の現実と虚構の関係が新たな段階に入ったことを巧みに描き出していたのである。

ところで、2001年11月3日付『ル・モンド』紙のボードリヤールのテキストと同じページに、モロッコ出身の作家タハール・ベン・ジェルーン (Tahar Ben Jelloun 1944-) の「呪いから脱出するために」と題する短い文章が掲載されていたことは、今となっては記憶する人も少ないと思われるので、少しだけ紹介しておこう。

この著名なアラブ系フランス語作家は、「アラブの知識人たちにとっては、今こそ、彼らが問いかけることも直視することもなしに接しているこの複雑な現実に関する真の批判的作業を、じゅうぶんな明晰さと謙虚さとともに始める時である」と述べてから、「9月11日は、結果として、西欧世界の場合以上に、アラブとイスラム系諸民族にとっていっそう激しい心的裂傷となっている」ことを指摘し、「テロリズムや逸脱と暴虐へのあらゆる誘惑と戦うためには、社会の土台である学校から出発しなくてはならない。それは、歴史と人間たちによって虐待されてきた社会組織を蝕んでいる病を治療することでもあるのだ」と結んでいた。¹⁷⁾

16) ウォシャウスキー兄弟が製作した映画『マトリックス』(第1部は1999年公開)が、ボードリヤールのシミュレーション論から多くの影響を受けたことはよく知られているとおりだ。ボードリヤール自身は、映画第2部に関しても製作者から協力を求められたが、彼らが自分の思想を理解しているとは思えなかったので断ったと、2003年秋に筆者に語っていた。

17) Tahar Ben Jelloun, *Pour sortir de la malédiction, le Monde*, le 3 novembre 2001.

3. トッドと『帝国以後』

9・11から遠くない時期に、この事件について言及したフランスの思想家は、もちろんボードリヤールばかりではなかった。いちばん早い時期の反応としては、2001年9月22日に世界的に著名な思想家ジャック・デリダ (1930-2004) が、フランクフルトで開催されたテオドール・アドルノ賞授賞式の受賞記念講演で、グローバリゼーションの進行とヨーロッパ共同体の発展という当時の状況を背景に「明日のヨーロッパの諸言語」の可能性について『フィシュ (Fichus)』と題された講演を行ったが、その際、脱構築の哲学者は、わずか10日ほど前の出来事に関するコメントを急遽追加して「9・11の犠牲者に対する私の共感 (コンパッション) は絶対的ですが、それでもなお私はこう言わなくてはならない。この犯罪に関して、私は誰の政治的無実も信じてはいないと」と述べていた。¹⁸⁾

また、1970年代末～80年代のフランス新哲学派 (les nouveaux philosophes) の旗手で、その後フランス政治権力の中核と関わりをもつことになったベルナール＝アンリ・レヴィ (1948-) は、2001年12月21日、『ル・モンド』に「われわれが9・11以後に学んだこと」と題するコメントを発表した。ユダヤ系知識人であるレヴィは、9・11テロの報復として二〇〇一年一〇月に始まった米軍のアフガニスタン侵攻「不朽の自由作戦」(イギリス空軍も参加)で、イスラム原理主義の武装組織タリバンが(一時)一掃されたことについて、「アフガンの教訓、アフガニスタン戦争が実証したことからわれわれが学んだのは、デモクラシーのグローバリゼーション〔民主主義の世界化〕が現代という時代のもうひとつの見とおしとなっているということである」と書いていた。¹⁹⁾

18) Jacques Derrida, *Fichus*, Galilée, 2002. 邦訳『フィシュアドルノ賞記念講演』(逸見龍生訳、白水社、2003年)。本稿の訳文は筆者による。表題のフランス語は、名詞としては服飾関係の用語で「女性用の三角形の肩掛け」を指すが、動詞 *ficher* の過去分詞としては「私はもうおしまいだ」とか「あの病人は直る見込みがない」といった用例が示すとおり「どうしようもない、末期的な」状態を意味している。

19) Bernard-Henri Lévi, « Ce que nous avons appris depuis le 11 septembre », *Le Monde*, 21 décembre 2001.

さらに、やはり「新哲学派」の代表的人物だったアンドレ・グリュクスマン（1937-）は2002年1月に刊行された著書『マンハッタンのドストエフスキー』で、この前代未聞の事件は「歴史の終わりでも文明の衝突でもなくて、世界化されたニヒリズムの時代にわれわれを投げ出した」と語っていた。²⁰⁾

いずれも10年以上前の「現代思想」の発言ではあるが、21世紀の意外外の幕開けを告げたカストロフに関する記録の一部として記憶にとどめておきたい。

といっても、ここで問題にしたいのはこうした9・11を直接論じた文章ではなくて、この日付以降の地球規模の変化を上記「現代思想」の代表者たちとは異なる、こう言ってよければ、実証主義視点から考察したフランスの歴史人口学者エマニュエル・トッド（1951-）の『帝国以後』である（現在フランス国立人口統計研究所研究員だが、そうした肩書きより先端的な現代史家として世界的に知られていることはいうまでもない）。²¹⁾

その副題「アメリカ・システムの崩壊に関する試論」が示すとおり、トッドの『帝国以後』は、9・11をきっかけとして（その前後から）始まった「アメリカ帝国の衰退という仮説」（著者の言葉）とその帰結を実証的に、つまり「大衆の識字化と受胎調節の普及〔出産率の低下〕（l'alphabétisation de masse et la diffusion du contrôle des naissances）」という客観的データを通じて論証しようと試みている。

刊行直後から原書も邦訳書もベストセラーとなり、10年後の現在なお多くの読者を得ているこの書物の概要を改めて紹介する必要はなさそうだが、訳者石崎晴巳氏の的を射た「解題」から核心部分を引用しておこう。

「本書はアメリカ論を越えて、より広い次元も備えている。人口学者たるトッドにとって、世界史を進展させる真の要因は、識字化と受胎調節の

20) André Glucksmann, *Dostoïevski à Manhattan*, Robert Laffont, 2002.

21) Emmanuel Todd, *Après l'empire - Essai sur la décomposition du système américain*, Gallimard, 2002. 邦訳『帝国以後—アメリカ・システムの崩壊』（石崎晴巳訳、藤原書店、2003年）。以下の引用は原文を参照しつつ邦訳に従うが、一部で表記表現を改めた。

普及であるが、この二つによってトッドは、いわゆるイスラム原理主義の真の意味を見抜く。すなわちそれは人口学的移行期の危機に他ならない。[…] トッドがいわゆる《テロリズムの脅威》に過大に反応しないのは、それが今日の先進国がかつて経験したのと同じ内的過程であり、識字率が一定の水準に達すると終息するという確信があるからである。識字化によって個人としての自覚に至った女性は受胎調節を行うようになる。[…] 地球の人口爆発という[…] 破滅の脅威の代わりに、トッドは21世紀の半ばに人口の安定に達するという、もうひとつの楽観的ヴィジョンも示してくれるとともに、識字化の進展による民主主義の普遍化という、もう一つの楽観的ヴィジョンも示してくれる。[…] このように本書は世界史の一般法則を定義し、世界全体の将来の姿を予測しようとする、包括的な世界史論となっている。』²²⁾

いきなり結論部分に踏みこんでしまったが、改めてテキストをたどれば、『帝国以後』の著者は、まず9・11以降「構造的反米派」が「アメリカ合衆国が全世界の均衡と幸福にネガティブな貢献をしていることを真顔で指摘できるようになった」という状況を「止まった時計」のようだと冷笑的に語る。この種の「反米派」の実体に関する具体的指摘はないが、すでに見てきたボードリヤールによる超大国アメリカ批判などがそこに含まれても不思議はないような書きぶりである。

そして、この種の批判とはまったく異なる発想から、トッドは、むしろ9・11以後のアメリカの肯定的なイメージを強調して、「9月11日の同時多発テロからまだ一年しか経っていない」時点で「世界は経済生活の資本主義的編成と政治生活の民主主義的編成のみが唯一妥当にして可能な編成であることを圧倒的多数で認めており、アメリカの覇権はその世界の中で受け入れられた権力である」と述べていた。そして、この覇権を維持するためにアメリカは「政治

22) 同上邦訳書「訳者解題」。

的、軍事的に関わなければならなくなる」が、その「経済力、軍事力、イデオロギー力は衰退の一途を辿っているのだから」、今後の世界史的課題は「アメリカの凋落というものをすべての国にとって最善のやり方で管理することに他ならない」のである（『帝国以後』「開幕」）。

こうした前提に立って、トッドは「全世界的テロリズムの神話（le mythe du terrorisme universel）」の考察へと進む。9・11に先立つ十数年間に起こったルワンダのジェノサイドからボスニア戦争までの殺戮、あるいは天安門広場での学生デモの弾圧やパレスチナ紛争等の「不条理の絶頂」、そして9・11の「アララーの名において遂行されたワールドトレードセンターの2つの高層ビルの破壊」といった数々の破滅的な出来事は、西欧人の心に「憎しみを基本構造とし、暴力が猛威を揮う地球」のイメージを植えつけた。

こうした「破局的イメージ」つまり「暴力に冒された世界」というイメージは「歴史の退歩という特殊なヴィジョンを助長する」が、そのような破局論は、すでに繰り返したとおり「大衆の識字化と受胎調節の普及」を通じて実現可能な「現実世界のすばらしい文化的前進（la formidable progression culturelle du monde actuel）」によって反駁されるだろうと、トッドは強調していた（『帝国以後』第1章「全世界的テロリズムの神話」）。

たとえば、トッドが代表的なケースと呼ぶイラン（1979年のイスラム革命以後は宗教上の指導者が最高権力者となるイラン・イスラム共和国）の場合、識字率は1980年51%、2000年77%であり、出産率（女性1人あたりの子どもの数）は1981年5・3、2001年2・5となっていて、識字率が50%向上すると、出産率が半減していることがわかる。したがって、イスラム圏を起源とする「暴力的、宗教的熱狂は、一時的なものにすぎず」、イランは（2002年現在）「民主主義的安定化に向かいつつある」と著者は指摘したのだった。その後今日にいたる10年間に、イランの社会的発展が彼の予想通りに進んだかどうかについての考察は本稿の範囲を超えるが、9・11に象徴される「全世界的テロリズムの神話」がフィクションであるというトッドの主張は、ボードリ

ヤールの言う「現実」のシミュラクル化とはまったく別の発想だが、少なくとも2002年の発言としては意義あるものだった。

それでは、グローバリゼーションの進行過程で、『テロリズムの精神』の著者が強調した「還元不可能な他者性」がどのような状況に置かれていると『帝国以後』の著者は考えていたのだろうか。

この問題に関しては、トッドが1990年に発表した大部の著作『新ヨーロッパ大全』の末尾で「ヨーロッパは普遍主義的になるだろうか。それとも、差異を尊重し、自民族中心主義的になるだろうか。他者の定義について一致しないかぎり、ヨーロッパ人たちは自己を規定できないだろう」²³⁾と述べていたことを思い出しておこう。

もっとも、それから12年後の『帝国以後』でも、トッドは「ヨーロッパ人たちが他者の定義について一致を見たとは述べていない。他者性の問題に関して、トッドは同書で「帝国というものの本質的な強さの源泉」は「普遍主義(universalisme)」つまり「人間と諸民族と平等主義的に扱う能力」であるとした上で、アメリカは「徹底的普遍主義の民族的・国家的成果」であると同時に、「根底的な差異主義(différencialisme)」という用語」でも描写できるのであり、「アメリカ合衆国の歴史には常に他者というものが存在した」と断言する。

こうして、「インディアンと黒人がこの異なる人間の役割を演じてきた」と著者は言うが、彼らもまた「アメリカ国民」として普遍主義の下に統合され、彼ら自身が結局そのことを望んでいる以上(マイノリティに合衆国から独立しようという目立った動きはない)、その他者性は「還元不可能な」他者性ではありえないだろう。他方、「普遍主義と差異主義を組み合わせる一つの総体」となした「アメリカのイデオロギー・システム」が「普遍主義と差異主義という対立競合する二つの原理に対するアングロ・サクソンの二面性を極端かつ病的な形で表現」したものだというトッドの着想は、他者性をエスニックな共同性の内部に囲いこもうとするものであるようにも思える。

23) Emmanuel Todd, *L'Invention de l'Europe*, Seuil, 1990. 邦訳『新ヨーロッパ大全』(石崎晴己、東松秀雄訳、藤原書店、1992年)。

とはいえ、9・11 以後の「弱体化し生産的でなくなったアメリカ」について、2002 年にトッドが鋭く指摘した次の言葉は、2003 年の「帝国は挫折する定め」と言い放ったボードリヤールの発言と響きあっていた。

「〔アメリカの〕最近の社会的・文化的覇権への主張、このような自己陶酔的な拡大のプロセスは、アメリカの普遍主義と同時に、その現実の経済力・軍事力も劇的に衰退して行く、そのあまたある兆しの一つにすぎない。世界を支配する力がないために、アメリカは世界が自律的に存在することを否定し、世界中の諸社会が多様であることを否定するのである。」
 (『帝国以後』第6章「普遍主義の後退」)

ところで、『帝国以後』では、9・11 という歴史的イベント自体への直接的な言及は少ないのだが、同書最終章(「ゲームの終わり」)で、トッドは「非対称的な支配は、被支配地域から発するテロという反動を生み出す」であり、「その最も成功したものが2001年9月11日のテロだった」²⁴⁾と述べていた。

とはいえ、留意しておく必要があるのは、ここで「成功」とは、たとえばボードリヤールが『テロリズムの精神』で「今回のテロの驚異的成功 (la réussite prodigieuse d'un tel attentat)」と書いたような実行犯側の「成功」というよりは、むしろ「本物の強国」をコントロールできなくなったアメリカが「帝国の振りをするため」に「非強国の分野で通用する軍事的・外交的行動」を選ぶための口実としての戦略上の「成功」だったということである。

ところが、トッドによれば、9・11 をきっかけとした「示威的軍勢力発動」は「結局、ヨーロッパ、日本、ロシアという真の強国を不安に陥れてしまい、いまや〔これらの強国同士が〕互いに接近するように仕向けている」。そのために、アメリカという「帝国」にとって、9・11 以後の実際のリスクは核大国ロシアと、工業大国ヨーロッパと日本の接近に他ならないが、「イスラム圏で

24) «...la domination asymétrique engendre, venant des zones dominées, des réactions terroristes dont la plus réussie a été celle du 11 septembre.» (*Après l'empire, op. cit.*)

のアメリカの奇妙な積極行動主義は、北半球の三大強国〔ロシア、ヨーロッパ、日本〕を長期的な接近の道へと絶えず押しやるのである」と、2002年にトッドは予測していた²⁵⁾。

その後の世界規模の地政学的展開を振り返る時、とりわけ中国の経済的・軍事的プレゼンスの加速度的な増大を考慮に入れるなら、トッドのこの予測がはたして的確だったかどうかについては微妙な点もあるが、「いま形作られつつある世界は、唯一の大国に統制される帝国となることはないだろう。それは、厳密に対等とまでは言えないまでも、ほぼ等しい規模を持ついくつかのネーションないしメタ・ネーションが互いに均衡を保つ、複合的なシステムとなるだろう」(『帝国以後』『ゲームの終わり』)という彼の指摘自体は、9・11以後の世界の状況を先取りすることになったと言えるだろう²⁶⁾。

以上、本稿では9・11とその後の世界をめぐるフランスの二人の思想家の考察をプレイバックすることで、「現代思想」の射程を改めて確認しようと努めてきた。

ボードリヤールとトッドの見解は、9・11以後アメリカという「帝国」の衰退が顕著になったという点ではほぼ重なっているが、「現在最終段階にある教育的・人口的移行期の苦痛の中で、世界は安定性へと向っている」のか(トッド『帝国以後』)、それとも「テロリズムは、その不条理と無意味のせいで、現代社会がみずからに下す評決であり、刑の執行でもある」のか(ボードリヤール

25) 『帝国以後』で、トッドは「地図の上では極めて小さいが、日本はアメリカ合衆国の工業生産に等しい工業生産を擁し、その気になれば、アメリカのそれに等しいかもしれないそれを上回る科学技術を擁する軍事を15年で構築することもできるだろう」(『ゲームの終わり』)とさ述べていたが、日本に関するこうした過大評価は、日本政府が(政権交代があったとしても)アメリカとの片務的安全保障条約を半永久的に維持することによって対米従属を国家の基本方針とし続けている事実を過小評価している。

26) Jean Baudrillard, «La violence du mondial» in *Power Inferno*, op.cit. 邦訳「グローバル・パワーの暴力」(『パワー・インフェルノ』、前出)。なお、ここで「テロリズム」とは9・11の同時多発テロに限定されるものではなく、広義には、あらゆる「還元不可能な他者性」によるアクティングアウト(「行動化」、精神分析では被験者が言語による自己表出を突然放棄して直接行動に訴えること)的行為をも含んでいるだろう。

ル『パワー・インフェルノ』)については、まったく重なりあうことがない。

結局、両者の差異は彼らの世界観・歴史観の本質的な相違にもとづいているように思われる。トッドの言うように世界が「安定化」へ向っているとしても、そして、識字率の向上と出産率の低下によって無知と貧困が相対的に減少するとしても、世界は現段階の消費社会・情報化社会以上に「ユートピア化」(ボードリヤールは、すでに1970年の著作で消費社会を「実現されたユートピア」と呼んでいた)するわけではなく、その後の世界から「不条理と無意味」が一掃されるわけでもないとしたら、私たちは9・11直後にボードリヤールが残した言葉に、もう一度耳を傾けてもよいのではないだろうか。

「テロリズムは、屈辱を受けた者や侮辱された者たちの絶望感に依拠しているが、グローバリゼーションの特権を享受する者たちの目に見えない絶望感にも、そしてテクノロジーとプログラムの支配に服従する私たち自身にも依拠している、この種の支配は、おそらく《グローバル化》した全人類が〔それ以上先へ進めず〕退行化してゆく構図を描き出すことだろう。(地球上の他の生命種に対する人類の覇権は、世界の他の部分に対する西欧の覇権のイメージそのものではないだろうか?)。そして、私たちの、この目に見えない絶望感は、あらゆる欲望が実現されてしまったという実感から生じている以上、確定判決のように決定的なものとなる。」(『パワー・インフェルノ』「グローバル・パワーの暴力」)

そのうえで、「行動する前に理解せよ」と説くトッドの、次の言葉を受けとめてみよう。

「われわれが〔…〕自分を凌駕する経済的・社会的・歴史的な諸力によって引きずられて行くのであるなら、市民としても政治家としても、われわれは何を為すことが出来るのだろうか？まず第一に、世界をあるがままに見るすべを身に付け、イデオロギーの、その時々¹の幻想の影響、メ

ディアによって養われる《恒常的な偽の警報》（これはニーチェの言葉だ）の支配を脱すること。〔…〕いずれにせよ意に反する結果になるような行動をしない可能性を確保することが出来る。」（『帝国以後』『ゲームの終わり』）

どちらも示唆に富んだ発想ではあるが、そこから「現代思想」の新たな展開が拓けるのかどうか、それはボードリヤール以後、トッド以後の新しい世代の知的選択にかかっているはずである。

付記——本稿の執筆にあたっては、トッドの主要著作の訳出・研究で著名な石崎晴己先生の御業績から多くを学ばせていただいた。また、故ボードリヤール氏（2007年3月6日没）からは、その思想の要点に関して直接教示を受けることができた。あわせて深い感謝の意を表しておきたい。

«Le 11 septembre et les penseurs français — Baudrillard et Todd»

par FUMI TSUKAHARA

Cet article a pour le but d'éclaircir les relations entre l'événement catastrophique du 11 septembre 2001 et la pensée contemporaine française à travers la réflexion sur les deux livres majeurs — *L'Esprit du terrorisme* de Jean Baudrillard (1929-2007, le philosophe français de renommée mondiale, spécialiste des analyses de la société de consommation) et *L'Après l'empire* d'Emmanuel Todd (1951-, le démographe français célèbre, ingénieur de recherche à l'Institut national d'études démographiques). Peu après cet attentat inoubliable qui a causé trois mille morts rien que par l'effondrement des Twin Towers du WTC à New York, Baudrillard a donné un article au journal français, *le Monde* (le 3 novembre 2001), intitulé *L'Esprit du terrorisme* dans lequel il a dit : «À la limite, c'est eux qui l'ont fait, mais c'est nous qui l'avons voulu», puisque «cela dépasse de loin la haine de puissance mondiale dominante chez ceux qui sont tombés du mauvais côté de l'ordre mondial. Ce malin désir est au coeur même de ceux qui en partagent les bénéfices ... Car c'est le monde lui-même qui résiste à la mondialisation.» Tandis que Todd a écrit en 2002 dans son ouvrage devenu le best-seller mondial (*L'Après l'empire*) que malgré l'image du monde catastrophique, «dans la douleur d'une transition éducative et démographique, la planète tend vers la stabilité, grâce à la généralisation de l'alphabétisation et à la diffusion du contrôle des naissances». Onze ans après le 11 septembre 2001, avec le déroulement incessant de la mondialisation des techniques, du marché et de l'information, le monde va-t-il se stabiliser ou se déstabiliser ? Voilà le sujet que nous allons aborder.